

# 沖縄創世神話の日本人

沖縄本島東海岸玉城村ミントングスク



アマミク神が築いたグスク（城）という。面殿（仮面）が祀られ、国王や聞得大君が参拝した。

## アマミキヨとシネリキヨ

沖縄の神話上の創世神。『琉球神道記』（1605）には男神シネリキュと女神アマミキュが天から降臨し、島を固定、往来の風によってアマミキュが孕み、三子を生み、所の主・祝女（ノ口）・土民のはじめとなるとある。『中山世鑑』（1650）には天帝、天城にアマミクを召し島造りを命ずるとあり、『おもろさうし』（1623）には日の大神がアマミキヨ、シネリキヨを召し島造りを命ずるとある。伊波普猷・外間守善・谷川健一はアマミキヨは海人部に属し、稲作をもたらした南下してきた神と考えている。

シネリキヨのシネについて、村山七郎は光、外間守善は太陽・日神としている。アマミキヨ・シネリキヨは、伊波普猷・仲原善忠は単一神とするのに対し、大林太良は『琉球神道記』の記載などから男女二神とする。

## 神名一覧

琉球神道記1605年	シネリキュ（男神）	アマミキュ（女神）
おもろさうし1623年	あまみきよ（女神）	しねりきよ（男神）
混効験集1711年	あまみきよう（男神）	しねりきよう（女神）
中山世譜1701年	阿摩弥姑（女神）	志仁礼久（男神）
球陽1745年	志仁礼久（男神）	阿摩弥姑（女神）

沖縄本島東の浜比嘉島 アマミク・シルミクの墓がある



奄美大島北部アマミキヨ降臨の地アマンデー（奄美岳）



外間守善『沖縄の祖神アマミク』築地書館、1990年

沖縄神歌の基本構造 ①アマミク・シニリクという創世神が登場し ②島造り・村造りをして ③稲作農耕を行なう

伊波普猷説を敷衍して、アマベ（海人部）から変化したアマミという語に敬称接尾辞のコ（子）がついてアマミコになり、コが沖縄方言的に変化してク、アマミク、つまりアマ→アマベ→アマミ→アマミコ→アマミクになった、とする。

敬称接尾語がつくことから、彼らは、漁撈、航海、稲作文化などをもつ高文化生活集団で、先住者たちから尊敬される人たちであった。

大和王朝成立期に漁撈、航海者として活躍し、四世紀頃大和王朝によって部民化され、紀伊、尾張、隠岐、豊後に置かれた四つの海人部のうち、沖縄と地理的に近い豊後海人部がアマミクと直接の血縁関係をもっているのではないか。

太古以来沖縄に打ち寄せた文化の波の一つ、あるいは主流が、弥生時代に九州から稲作を携えて南下したアマベであった。

海人上陸伝説のある久米島アール浜



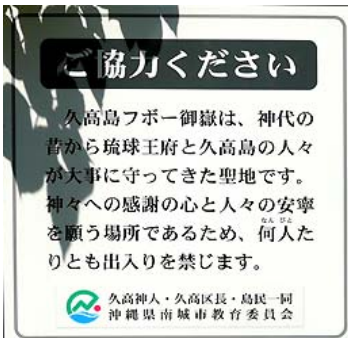
本島北部奥間比地の井泉とミルク田 アマミクが稲作を伝えた神の田と泉



本島最北端国頭村辺戸安須森御嶽 『中山世鑑』でアマミキヨが最初に天下りした三つの嶽



久高島フーボー御嶽 『中山世鑑』に記すアマミク降臨の七嶽の一つ



本島南部玉城村アマミク上陸の浜百名ビーチ



### 沖縄創世神話と台湾原住民神話の比較

台湾先住民は自分たちこそ本来の居住民であるという誇りをこめて原住民と自称する。政府により現在14種族が認定されている。すべてが山中、海岸、島などの僻地に住む。彼らのなかで日本人を祖先とする創世神話を伝える種族がいる。

沖縄神話に登場するアマミキヨ・シネリキヨは神として崇拜対象になり王、巫、住民のすべての祖となっているが、台湾神話に登場する日本人は兄弟同胞として親しまれている。

例えば鄒族創世神話には次のように伝えられる。

いつのころか知らない遠い昔、新高山（玉山）山上に一家が住んでいた。そのとき、周囲は海であった。しかし、海水が引き、山上は山と平地になり水が欠乏した。祖先は水を求めて、一隊は知母勝の地に移り、一隊は日本へ向った。別れるとき、再会の印にと、一張の弓を二つに折り、知母勝へ向った人たちは上の半分を取り、日本へ向った人たちは下の半分を取った。日本人は自分たちの祖先である。（尹建中『台湾山胞各族伝統神話故事与伝説文献編纂研究』1994年・平成6）

沖縄神話に登場する日本人は島造り・村造りを行なっているが、台湾神話では食物を発明したとある程度である。

太古、鄒族はマアラア(日本人)、プクン族とともに新高山（玉山）の頂に住んでいた。当時は四面海で魚や獣を捕って生活していた。水が引いたとき動物が尽きたので弓を三つに折って決め、上部にマアラア(日本人)、中部にプクン、下部に鄒族と住み分けた。間もなくマアラアは山を降り、動物のいない所へ移動し、食物に困って種々の物を発明した。（『蕃族調査報告書』大正7年・『生蛮伝説集』大正12年・1923）

台湾神話では十四種の原住民神話の多くが漢人（中国人）との戦いを伝えて

いるが沖縄神話に漢人が登場することはない。以下、台湾神話から例をあげる。

太古はみなナツガにありしもの、我らの同胞なりき。その後ナタナサに移りぬ。ナタナサにありし時に漢族に追われて三十人ばかり殺されたれば、ウムウムルに移りぬ。されど場所狭隘なればとて、またタワラナに移りたり。ここも悪疫流行して死する者多かりしかば、タヌウに移りたれど、またも漢族に伐たれてナオワナに移れり。（南鄒ツオウ族『蛮族調査報告書』大正7年・1918）

太古、エメバル山の頂上に巨石あり。その石割れて、数多の人間出でたるが、中にタケトル、タケバカの兩人、中央山脈を越えて南投方面に赴き、初めて漢族に会い、そこにてしばし戦いしが、敗れて再び山中に入れり。（布農ブヌン族『蛮族調査報告書』大正7年・1918）

沖縄神話では稲作、鍛冶の渡来や起原とアマミクが結びついている。しかし、台湾神話で日本人が稲作や鉄器の文化の起原と結合することはない。

外間守善はアマミキヨ・シネリキヨを、敬称接尾語がつくことから、彼らは、漁撈、航海、稲作文化などをもつ高文化生活集団で、先住者たちから尊敬される人たちであった、と考える。

谷川健一は『おもしろさうし』冒頭の「あまみきよが真細工（まさいく）首里杜（もり）げらえてげらえ遣りおぎやかもいにみおやせ 又しねりやこが真細工真玉杜（まだまもり）げらえて」の細工は大工・鍛冶の総称とし、全体は、あまみきよ、しねりきよという細工人の造った首里城を尚真王に奉れ、となり、渡来した技術集団が首里城を建設して沖縄の王に奉った、という意味とする。

沖縄のアマミキヨ・シネリキヨ神話はほとんど全土に広がっている。他方、台湾の神話で日本人が登場するのは鄒・卑南・排湾・泰雅の四族の原住民神話に限られ、従って流布地は彼らの居住地だけとなる。

谷川健一は、アマミキヨは九州の西海岸を經由してまず伊平屋・伊是名など南島北部の島々に足がかりを求め、次に本島北部に上陸し、東西に分かれて南下したとする。

外間守善もほぼこれと同じで、奄美などを足がかりに南下し、石垣、八重山の島々にまで到達したとする。

台湾神話で、大洪水後に男女が生存する洪水神話は、鄒族をはじめとする14の原住民に共通して存在するが、祖先の誕生には各種の変型がある。木の実から誕生、色のついた五個の石を生む、卵生、蛇との婚姻、種を蒔く、などで

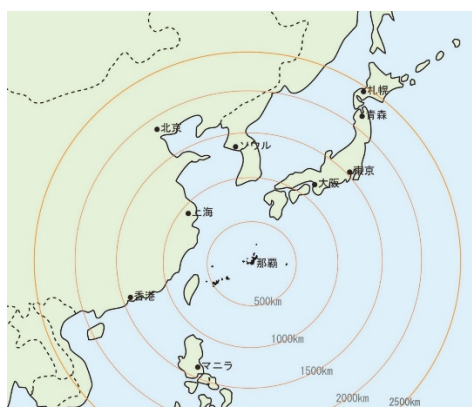
ある。

これに対し、沖縄神話では、洪水神話は『球陽』『琉球国志略』にみられるだけで、ほかは天から降る降臨神話である。例をあげる。

昔、この国のはじめ、まだ人のいない時に天から男と女の二人が下りた。  
(琉球神道記)

けだし我が国開闢の初め、海浪氾濫し、居所するに足らず。時に一男一女あり。大荒の際に生ず。(球陽)

### 沖縄文化四重構造論



- 1 黒潮に乗って渡来した東南アジア文化 セジ信仰 洞窟信仰 海上他界など
- 2 東下した大陸系文化 竜舟祭 墓制 風水思想 石敢当 シーサー 端午祭 来訪神 按司とノロによる祭政一致 ミロク信仰など
- 3 南下した本土日本文化 神道 仏教 稲作 鍛冶など
- 4 明治以降に欧米から入った西欧文化 洋風建築 西洋料理 西欧音楽 洋服 各種ファッションなど

以上、両神話の比較を通してはっきりいえることがある。

沖縄神話には本土日本の文化の影響が強いのにに対し、台湾の原住民神話には日本への親愛の情が強く表現されている。沖縄の天孫降臨神話には日本のアマテラス神話、さらにはイザナギ・イザナミの国土生成神話の影響がある。そして、稲作・鉄器文化も本土日本からアマミキヨ・シネリキヨによってもたらされている。文化の十字路ともいべき沖縄には事実は中国大陸や東南アジアから多様な文化が流入していたが、本土日本の文化一種だけが強調されて神話化された。沖縄はまぎれもなく日本である。

台湾は、14世紀後半からの清、17世紀前半のオランダなどが日本よりも

はるかに古くから占拠していた。日本が統治した期間は1895年（明治28年）から1945年（昭和20年）までのわずか半世紀にすぎない。にもかかわらず、台湾原住民神話には日本への親愛の情が強く表現され、日本人を遠い時代に分かれた同胞・兄弟とまで伝えている。

日本との交渉の歴史が浅いために、神話上で日本文化の影響が謳われることはなく専ら親愛の情だけが、中国人への敵対感情と対照的に、表現されている。

まぎれもなく、日本人による半世紀の台湾統治の施政の成果である。

つづく